

リモ I 峰 初 登 頂

尾 形 好 雄

*

近年、日本人の平均寿命は延びる一方で、今や人生80年時代と言われる。こうした高齢社会を迎えるのに伴って生涯教育、生涯スポーツが叫ばれ、世間では多種多様なカルチャー教室やスポーツ教室が中高年で賑わいをみせている。登山の場合も子育てから解放され、老後の憩いを山に求める中高年齢層の登山者は、増える一方である。

昭和63年は、南海ホークスの門田選手の大活躍で不惑ブームが日本中に沸き起り、登山の世界でも50歳以上の隊員だけでインド・ラダックのヤン峰(6230m)に登頂したり、58歳と9ヶ月の人がパミール・レーニン峰(7134m)に登頂、さらには49歳の人がブロード・ピーク(8047m)に登頂するなど日本人の中高年パワーが話題をまいた。

私が昭和42年に社会人山岳会に入会した頃、会の先輩達の登山生命が30代で終わってたことを思うと正に隔世の感がする。

今夏、インド登山財団(IMF)と日本ヒマラヤ協会(HAJ)との合同隊で、東部カラコルムの未踏峰、リモ I 峰(7385m)に向かった日印合同カラコルム登山隊の日本側メンバーの平均年齢も42歳と高かった。

紆余曲折を経てようやくリモ I 峰の登山許可を手中にしたとき、隊員は、HAJ会員の中から募ることになった。そして、昭和62年12月までにリモに向かう7人の待が集結した。

最年長者は、53歳の青木正樹。四国・松山商科大学のフランス文学の教授である。20年の永年勤続のボーナスとして、学長も2ヶ月位の休暇を認めてくれそうだから参加の枠があれば参加したいと申し出られたとき、昭和39年の昔からボリビア・アンデス、カラコルム、ネパール・ヒマラヤと着々と登ってこられたこの大先輩の参加は非常に心強く、この豊富な経験でできたら隊長もお願いしたかった。しかし、合同隊の煩わしさを考えるとこれはやはり自分が引き受けざるを得ないであろうと割り切った。

次なる高齢者は、48歳の渡辺斉。知る人ぞ知るまさしく山一筋に30年間歩み続けてこられた登山極道一徹の方である。定年まで勤めては私の登山ができなくなると、25年間勤めた会社を辞め、44歳から高峰登山を始められ、毎年3ヶ月～6ヶ月は、ヒマラヤなどで高峰登山を实践すると言う徹底ぶりで、昨年のマッキンリーもペルー・アンデスも、リモのための高所登山訓練として出かけるなど7000m峰の処女峰にあくなき情熱を燃し、その執念たるや他の追従を許さないほどの厳しさがある。

次いで新郷信廣、45歳。フリー・クライミングからヒマラヤの高峰登山迄オールラウンドに何んで

もこなす九州・佐賀の岳人。昭和53年からこの10年間に8回も海外登山に出かけ、今回のリモI峰を含めると3つの7000m峰に初登頂したことになる。その昔、屏風岩東稜で16mmカメラを回すなど、もともと小型映画に癡っており8mm映画では、既にプロの域に達していたが、マモストーン・カンリの遠征でビデオ・カメラを回してからはすっかりビデオに引き付けられ、チベット・カルジャン峰のビデオ・フィルムは、NHK九州の新春特集で紹介されたほどである。今回も勿論、映像記録担当をお願いした。ところが今回は、2月の氷漠訓練の帰路、転んで右膝靭帯を損傷する大ケガをし、出発直前の5月迄入院生活を強いられ、一時は参加も危ぶまれた。しかし、現地に行ってみると若い隊員が舌を巻く程エネルギーに活躍され、病院でトレーニングしていたのではないかと、^疑なされていた。長年トレーニングで鍛えた身体にとって出発前の3ヶ月は、良い休養になったのかも知れない。

ここ迄が平均年齢を上回る隊員である。

次は、高橋純一、39歳。れっきとした外科医である。今回の遠征直前に、倉敷の病院から大阪の病院に移られた。リモのために移られたのか、移る予定があってリモに行けたのかは定かでない。このドクターは、当初三国合同チョモランマ／サガルマータ登山隊にドクターとして参加を要請されていたが、チョモランマへ仕事に行くなら好きな山登りに汗を流した方が良く、このチョモランマの話蹴り、大枚をはたいてリモに参加された。昨今タダなら山はどこでも行く、と言う輩の多い中で、このドクターの心意気は是非とも見習いたいものである。

昭和49年からパキスタン、ソ連、中国の山々を登り続けてこられ、今回も含めて全てパーフェクトの成功を収められている。これまでに7000m峰4座を含む5つの頂に足跡を印す。

隊員中第2の若手は、吉田秀樹、35歳。信州大学学士山岳会のホープである。厳しい山を登りたいと、当初ブータンの未踏の最高峰ガンケル・ブンズムに参加したが、ガンケル・ブンズムが昭和62年2月に突如閉鎖されてしまって幻の遠征となってしまった。その後、リモガンケル・ブンズムに孫色のない山として参加した。

昭和53年のジュティボフラニからヒマラヤ登山が始まり、アンナプルナII峰南壁など常に厳しいルートを追いかけてヒマラヤを^{マツコ}彷徨。寡黙ながら確実な登り屋で、今回も常にトップ・グループで活躍。まさにいぶし銀のような素晴らしい岳人である。

今登山隊の日本側最年少者は、二俣勇司、33歳。33歳で最年少と云うのだから可愛想になる。吉田の後輩で同じ信州大学学士山岳会。昭和55年にガネッシュ・ヒマールIII峰以後、久しくヒマラヤから遠ざかってたが、当初ガンケル・ブンズムに行きたくて先輩の吉田を口説いてきた。その後、ガンケル・ブンズムが駄目になってその熱い想いをリモにぶつけることになった。

しかし、その張切りが裏目となり、先発でニューデリー入りして直ぐ、原因不明のかぶれに顔面が侵され、両眼がつぶれるように腫れ上がってダウン。一時はこのまま日本へ送り返さねばならないかと危ぶまれた。何が利いたのかその後回復して一緒に出発することができた。

そして最後に日本側の隊長は、今年で不惑を迎えた小生となった。昭和59年のマモストーン・カンリに次いで2度目の日印合同隊である。

こうしてリモに参集したメンバーの顔ぶれを見るとその大半が、若い頃から山に取り憑かれ、地道に20年も30年も山登りを継続されてこられたどちらかと言うと希れな部類の人達ばかりである。このメンバーを見てこの地に長い間想いを馳せてこられた人などは、こうした味のある年輩者でリモに挑まれるのならリモも本望でしょうと言ってくれた。

一方、「この中高年登山隊に果たしてリモは落とせるのか」の下馬評もあって悲観視する向きも多かった。

リモI峰は84年(昭和59年)のインド陸軍工作部隊、85年(昭和60年)の印英合同隊、86年(昭和61年)の印豪合同隊などが相次いで挑みながらもその未踏の頂は陥落されず、難攻不落を誇っていた。85年隊(昭和60年)のステファン・ヴェネブルズなどは彼の著書『ペインティッド・マウンテン』の中で自分達のルート・グレーディングをED(極端に困難)とし、その難しさは冬期アイガー北壁に匹敵すると述べている。それだけに我々の成功を危ぶむ声が一層強かったのかも知れない。

こうした風評の中で、如何に登るかを検討しなければならなかった。こう言う時期だけに一度食い逃せば、もう二度と相まみえることは不可能に近い。不遜ながら一発必勝の策を練る必要に迫られた。中高年登山隊で何よりも考慮しなければならないのは、高所での復元力が遅い点であろう。如何に高所疲労を残さず各自の体力を充分に発揮させるかに重点を置いたタクティクスを考えた。

現地入りしてから急峻ながらも、より短い南壁にルートを探ったのも、こうした観点からである。当初の計画では、印英合同隊と同じ南西稜を予定した。彼らは、リモI峰に登るには自分たちのルートこそ最良のルートであり、一番可能性が高いとその報告書の中で述べている。我々も先蹤者に敬意を表してこのルートを採用ことにしたが、長く急峻な稜は、一般に壁に比べて困難で時間がかかるのは周知のとおりである。この点は、計画段階から一番懸念されていた。しかし、現地で偵察した結果、南壁など真中に喰い入る大クローワールの左手に格好のラインを見いだした時、我々中年登山隊にとって頂上への道は一段と近づいたのである。

*

東部カラコルムを流れるアッパー・シャイヨーク河とシアチェン氷河、ヌブラ谷に挟まれて南東に連なる一大山脈には、リモ・ムスターグやサセル・ムスターグと云った山脈が横たわる。このリモ・ムスターグの中で、テラム・シェール、セントラル・リモ、サウス・リモ、ノース・テロン、サウス・テロンの諸氷河に囲まれた山塊がリモ山群である。リモI峰(7385m)は、この山群の盟主として長く未踏を誇ってきた。

この山は、古くからピーク51と言うマップ・ナンバーで知られてきたが、なにぶんアプローチが厄介なために不遇をかこってきた。加えて1947年(昭和22年)の印パ分離独立以降、この辺りのヌブラ、シャイヨー

ク、アクサイチン地区はインド・パキスタン・中国の三国が踵を接する辺境地区となり、その政治的ロケーションの故に、外国人にとって長く禁断の山域として門戸を閉ざしてきた。

(昭和59年)
1984年、日本ヒマラヤ協会(HAJ)とインド登山財団(IMF)の合同によるマモストーン・カンリ(7526m)登山隊が、印パ分離独立以来、外国登山隊としては初めてラダック山脈を越えてヌブラ谷に入り、初登頂に成功した。日本人としては大谷探検隊以来、実に75年振りの入域であった。

その翌年2月、IMFは、リモを含む東部カラコルムの山15座をインド領カラコルムとして、自国との合同隊にかぎってオープンすることを発表した。このセンセーショナルな発表は、(昭和55年)1980年以降シアチェン氷河流域への門戸を閉ざしてきたパキスタンはもとより、世界中の登山者を驚かせた。

この発表と同時にリモへの挑戦も前述したように果敢に行われ、陥落するのも時間の問題と思われた。ところがリモI峰は(昭和62年)1987年まで3隊の挑戦を退け、未踏のまま残されていたのである。

*

(昭和63年)
1988年6月15日、灼熱地獄のようなデリーでの出発準備を終えて、空路スリナガルへ飛んだ。スリナガルからは、2日間のバスの旅でラダックの首都レーに到着した。

レーには、4日間滞在してポーターのアレンジやポーター用装備・食糧などの手配をする。ヌブラ谷のポーター事情は悪く、今回もレーからネパール人出稼ぎ者をポーターとして連れていくことにした。

23日、軍用トラック3台とジープ1台でヌブラ谷へ向かった。山岳道路としては世界で最も高い峠のカルドン・ラ(5486m)を越え、再びシャイヨーク河の悠久な流れと相まみえた。レーからの第1日目は、温泉が豊富に湧き出るパナミックに泊まる。ここで1日滞在した後、25日、ワルシに向かった。

ワルシから先、シアチェン氷河の舌端までは、最もシークレットなエリアで、撮影は勿論、過去の合同隊は、いずれもこの区間は夜間通行を強いられたと言う。日中、この区間を通行するのは我々が始めてと言われ、緊張する。

27日、ワルシからシアチェン氷河の舌端にあるインド軍の最前線基地を通してシアチェン氷河に入り、更にテロン谷へと足を進めた。

アプローチにおける最大の山場は、テロン・トブコ(河)を如何に渡るかであった。東部カラコルムの登山時期をいつにするかは、複雑な要因がからんでくる。例えば初夏の早い時期では、スリナガルからラダックに至る途中のゾジ・ラ(3529m)やカルドン・ラがまだオープンされないし、これらの峠がオープンされる頃は、山々の氷河の融雪が盛んになり、アプローチにおける谷筋の増水が懸念されるなど仲々厄介な問題をかかえている。

我々は、4日間の奮闘でようやくサスペンション・ブリッジを架けることができ、取りあえず「リモ見ずして」と云う結果だけはまぬがれた。

この最大の課題を解決してテロン谷を進み、7月4日、ノース、サウス両テロン氷河の合流点にB C (4300m)を設けた。翌日、ノース・テロン氷河を約9km遡った地点ABC (5050m)を建設。この地まで上がって初めてリモI峰、III峰の全容が大きく眺められるようになる。

翌9日、ノース・テロン氷河右俣から分かれてリモI峰の南西面に喰い込む氷河に入り、この氷河の源頭を成すアイベックス・コル(6200m)直下のスノー台地にC1 (5960m)を建設した。

11日の偵察からルートは南壁に決定し、翌12日から本格的にルートに工作を開始した。まずC1からアイベックスまでの氷壁とコルから上のデルタ状雪壁に9本の固定ロープを施す。さらに翌日、前日の終了点からコンケーヴ状の岩壁帯を4ピッチで抜け、そこからは、5ピッチ雪壁を登った。

ところが、この13日に青木隊長が、ヒドン・クレヴァスに転落する事故が起きた。幸い4~5mの転落で止まり救助されたが、この事故は、本人の登頂に影響をおよぼすことになってしまった。

14日から16日にかけては、悪天候に見舞われ、ルートは延びなかった。大体6~7日間周期で3日間の悪天候と言うパターンのようなのである。

ルート工作を再開したのは18日。しかし、3日間降り続いた雪のため固定のロープは雪に埋もれ、これを掘り起こすのに時間がかかり、結局この日は5ピッチしか延ばすことができなかった。

翌日から、南壁の核心部と目された岩壁帯にかかる。前日の終了点から左上して一段上の雪のバンドに上がり、これを右上へ1ピッチのトラヴァース。その上10m程の嫌しいスラブを直上したあと、頭上のハングからの落石、スノーシャワーを避けるように左方へルートを探る。

5ピッチ延ばしたところでこの日はおしまいとなる。それでもこの日のルート工作で、南壁の核心部は、ほぼ終わった。ただ困ったことに、南壁は、その急峻さ故にキャンプ地が得られず、C1からここまでキャンプ適地を見い出すことができなかった。やむなくこの日の終了点近くの、狭く外傾したテラスに1張のテントを設営してC2 (6750m)とした。しかし、このキャンプは、ほとんど使われず、この日インド側メンバー2名が1泊しただけに終わった。

C2に泊まった2人は、翌20日上部のルートを見いだすことができず、この日は、1ピッチもルートを延ばせなかった。このため尾形、新郷の2名が21日にC1から一気にC2へ上がり、そのまま6ピッチ半ルートを延ばして南壁突破のメドをつけた。

22日、予定の周期より1日早く、この日から天候が崩れ始め、25日まで続いた。

この4日間の悪天候をやり過ごし、26日からアタックに向けて行動を開始した。前夜、ABCで発表されたアタック・プランは、日印双方3名ずつの6名パーティで2回に分けて頂上を目指すこととした。

27日、先日の最高到達点からさらに4ピッチ登って南壁を抜けだし、待望の南西稜上に飛び出した。しかし、飛び出た稜線は、両側にスパッと切れ落ちたナイフ・エッジで、C3を設けるどころではなかった。取りあえず一次隊の中から日印双方2名ずつが残って、あとはC1へ下がることにする。狭

いリッジを削ってどうにか1張のテントを設営し、ここをファイナル・キャンプとした。高度は7000m。

翌28日、尾形、吉田、N・D・シェルパ、ツェワン・サマンラの4人はC3からルート工作をしながら頂上に向かった。キャンプから続くナイフ・エッジは、左側壁をトラヴァースし、裏手に喰い込むガリーを詰める。1ピッチ半でピナクルの基部に出た。ここから不安定な雪壁を雪崩の脅威におびえながらトラヴァースする。ようやく広々とした雪面に出たのは、C3から3ピッチ経たときであった。

さらに、急峻な雪壁から雪稜をたどると、頂上直下の広い鞍部に出る。懸念していたギャップは、なかった。続くミックス壁に最後のメイン・ロープを固定し、頂上雪壁を慎重に登ると、間もなく頂上であった。我々4人が頂上に達したのは、14時03分。続いてC1から上がってきたラッタン・シンとカネイヤ・ラルの2名も16時前に登頂した。

29日には、前日C3入りした新郷、二俣が、まず7時55分に登頂。続いて3時半にC1を出発したシェルブ・ Cholデンが、9時40分にそれぞれ登頂した。また、この日C1を6時に出発した渡辺、高橋の2人のうち、渡辺は、そのまま登り続けて17時20分に登頂した。高橋は、翌日のアタックに備えてC3に留まった。

30日、高橋は、単独で頂上を目指し、前夜の降雪によるラッセルに苦しみながらも12時13分に登頂した。こうして東部カラコラムの最後の玉峰として難攻不落を誇ってきたリモI峰も、その頂を明け渡したのである。

*

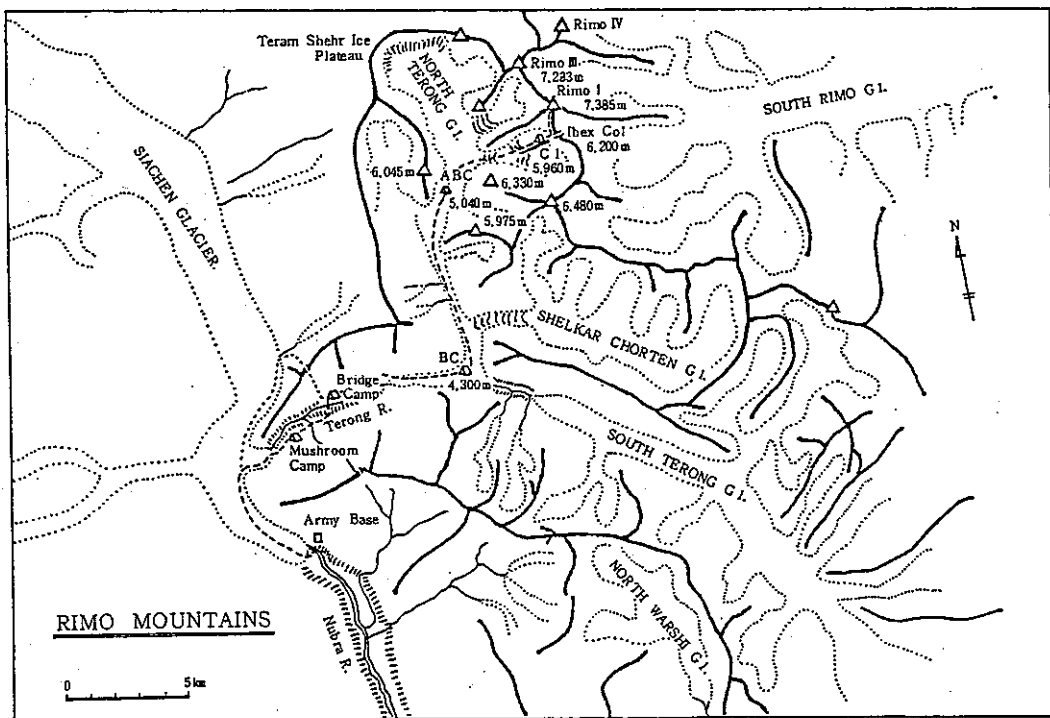
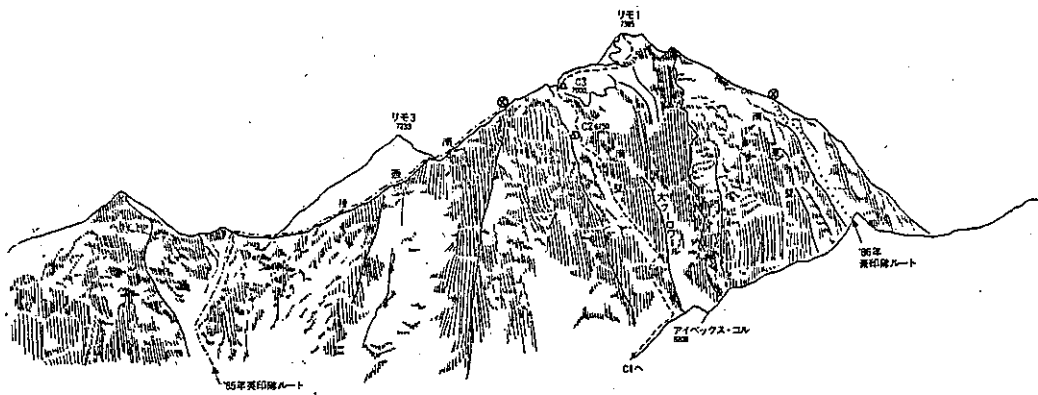
何年か前にある新聞で『地球上の最後の輝きを求めて』と言う見出しで7000mの未踏峰争いが紹介された事がある。東の玉峰の名に値するような未踏峰への熱い眼差しが述べられていた。その後、それらの数えるばかりの玉峰は、年々登られていき、最近では極僅かになってしまった。

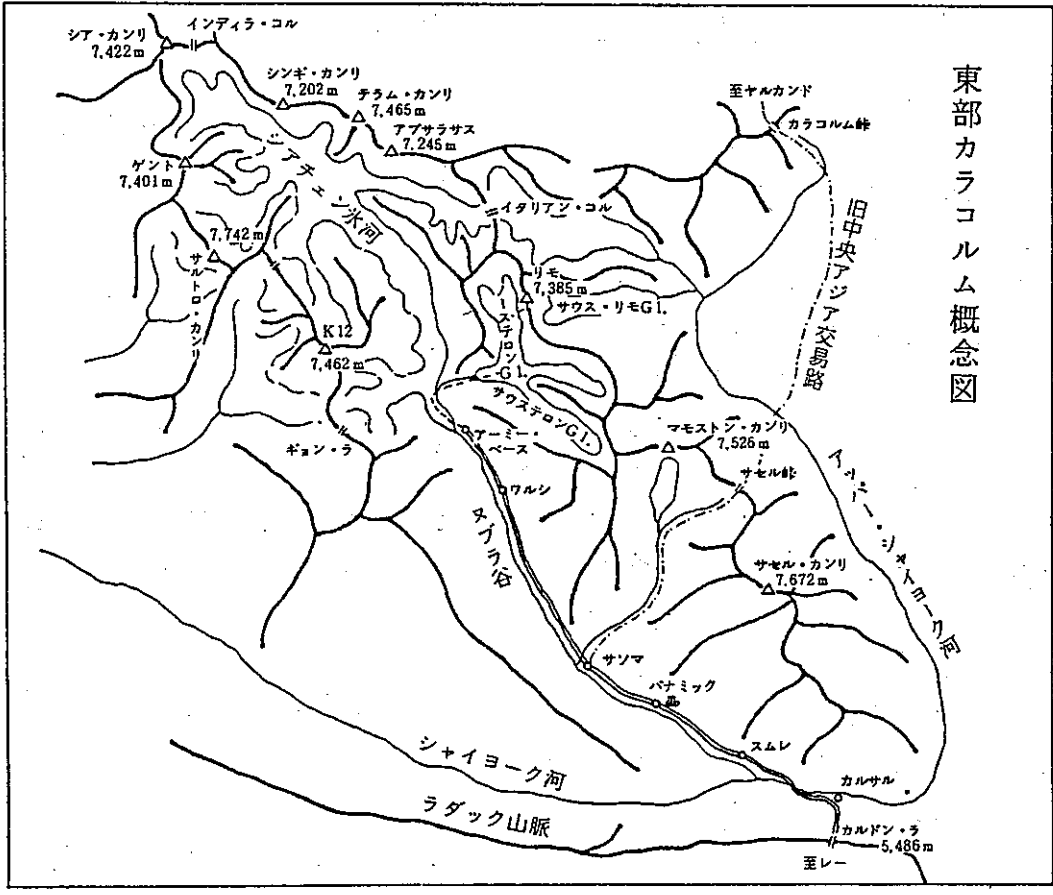
こうした情勢の中で、再びカルドン・ラを越えてリモと言う処女峰に相まみえることができたのは、誠に幸運であったとしか言いようがない。

H A Jの先輩達が東部カラコラムに寄せてきた熱い想いは、1970年の昔に遡る。以後、長い時の流れの中で、取り巻く情勢が変遷を重ね、推進する人が替わろうとも、この想いは、絶えることなく脈々と引き継がれてきた。この飽くなき情熱の継続こそが、マモストーン・カンリを初めとしてサセル・カンリ、リモと言う東部カラコラムの3部作を結実させたのであろう。

遅れてきた筈の我々が、この美酒を汲み取る榮譽にあずかる時、この地に想いを寄せられた多くの先蹤者達に想いを馳せられずにおれない。

4年振りのヌブラ谷は、変わる事なく緑美しい谷であった。





東部カラコルム概念図